

# Newsletter

MAY 1997

## AAACKの 現状と将来 を考える

### —座談会の記録—

ニューズレター第3号にAAACKの現状に対する外部からの批判、会員の反省などを述べる文章が掲載されています。これを受けて「AAACKの今後を話し合う会」を去る四月二〇日午後一時から五時まで京都鴨川河畔くに荘においてもちました。その内容のあらましをここに示します。

(文責 世話人 酒井敏明)

出席者

新井 浩	伊藤宏範	遠藤克昭
齋藤惇生	酒井敏明	潮崎安弘
清水 浩	左右田健次	高村泰樹
寺本 巖	中島道郎	西山 孝
能田 成	平井一正	広瀬幸治
松井敦男	松原英夫	松本保博
森本陸世	横山宏太郎	

酒井..(趣旨説明) AAACKは会員数は増えないし、停滞している。魅力がないから入会の希望者も少ない、という声があり、AAACKの今後を話し合う会を企画した。普段聞きにくい会員の意見を集める方策の一つとして、関西在住を中心とし岐阜、愛知、新潟を含めて八〇人ばかりに案内状を出し、首都圏からもどなたかに出てもらいたいと連絡をした。

今日はまったくの非公式の会ではなく、準公式の会という理解で、理事や会長も出席されているが、肩書きを離れて自由なご意見を出して頂けたら幸いである。

梅里雪山登山隊の総括は別の機会におこなわれる筈なので、今日は触れるにしても最小限にして頂きたい。前半はおもにAAACKの現状をいかに認識するか、またその原因を探ることにし、後半は将来の目標は何か、またその方策として何が考えられるかを、話し合っただけと思う。

### 第一部 AAACKの現状把握

#### —その原因について—

平井..若い人がなぜAAACKに入会しないのか、それは若い人にとつ

てAAACKに魅力がなくなったからだ。それは金と政治力にものをいわせて、京都大学帝国主義的な遠征をおこなってきた結果、若い人がついてこなくなった。処女峰の価値が低くなり、登山の価値観が変化していく中で、AAACKが時代遅れの従来の登山をくりかえした結果である。

中島..大体山に登る若者自体が減ってきている。山岳部も低調である。だからこの問題は登山界全体の問題でもあるのではないか。このなかでAAACKをどういう風にとらえるかである。

高村..山岳部員を、若者をひきつける力量がなかった。私は会長になったときに、政治力にものをいわせる金集めには批判的であった。軌道修正をはかるつもりだったが、いったん動きだしたらこうなってしまう。過去をそのままひきずってしまった。

いままですAAACK会長が京大教授であったことも検討しないといけない。かつて理事会で今西寿雄さんを会長に決定したことがあったが、それを今西錦司先生がやったことがある。会長に京大教授になることにはメリットとデメリットがある。

京大が創立一〇〇年を記念して岩波映画社に記録映画を制作させているが、今西、木原、桑原などの、いわゆる探検派を入れているし、チヨゴリザの映画も入っている。

潮崎…かつてある学会の副会長をしたとき、学会を専門家集団としてとらえるか、もつと一般的な専門家でないひとも含めた集団としてとらえるか、議論したことがある。AACCKも同様である。かつてのAACCKには山イコール人生という事で登山を考えていた人が多かった。一方、先鋭的な登山でなく、山岳部のOB集団としての親しみでAACCKに入っている人もいる。山岳部のOBがAACCKに入らないのは、専門家集団としてAACCKをみているからではないだろうか。AACCKはOB会的性格をもつてもいいのではないか。

酒井…京大山岳部のOBの会は笹ヶ峰会として先年発足した。OB会がなかった昔と現在では状況が少し変わっている。

広瀬…AACCKはそもそも何かというと、これは今西さんの会である。昭和の初年にヒマラヤに登るために創られた会である。そこその成果をあげて、そして今西さんが亡くなった現在、そういった背景を考えないといけない。小さな学会では大リーグがいて活動している。大きい学会ではお祭騒ぎはあるがたいしたことはない。学会に例えていえば、AACCKは小さな学会として作られた。

外野席の応援団にいてみると、プレイヤ―もいるし、ベンチにはいろいろの人がい

る。これからどういうプレイをするのか。今更金集めはかつこ悪くて、今後はあの方式はやめるべきである。

改革案がなければ解散や。

斎藤…いま活発に動いている大学山岳部は明治大学、福岡大学くらいなもので、立教などは部員ひとりしかない。一方JACの会員はふえているが、ほとんどは山をはじめた中高年の人である。こういう人に対する対策がJACの今後の問題である。

広瀬がいったように、今西さんのAACCKにおける存在は大きい。しかし一方JAC京都支部も今西さんが作ったが、こちらは会員が三倍になるほど発展している。地元の人を吸収していくような計画をたてたのがよかった。

AACCKは横の広がり求めて探検的な方向に行くということも考えられる。

森本…ヤルンカンのときに京都大学帝國的な登山が始まった。そしてこのころから山岳部OBがAACCKに入るといふ線がくずれた。初登頂に成功したが、遭難者を出した。当時いろんな議論がおこなわれたが、総括はできないままに終わった。私などには、AACCKは今西さんの会という意識はなかった。

東京でAACCKの会をやると、四〇人は集まる。世代の違いでギャップはあるが、集まってくる人はOB会的楽しさを求めてくる。

若い人たちのなかで、登山をしようという話はないが、少し年上のわれわれ仲間には山に登ろうという空気が出ている。若い人が入

ってくるような努力もしたい。京大のアメリカンフットボール部は良い手本だ。

斎藤…結果は駄目であったが、短期間でメイリの再挙をしたことで京大の評価があがっている。さすが京大と。このあと続かんことには努力は続けないと。

能田…AACCKの現状をシビアに考えないといけない。民間から金を集めて山に行くのは、ヤルンカンまでは許されたが、八〇年代以降処女峰がほとんどないときにそんなやりかたをするのは、アナクロニズムである。少々甘いえさをぶらさげても若い人は入ってこない。若い人が入らない以上、活性化はあり得ない。専門家集団の旗はおろすべきだ。

広瀬…ヒマラヤの処女峰に登ることが社会的意義のあつた時代はそれでよかった。君の意見に賛成である。

寺本…松下は合計すると約一億円くらいはAACCKに出しているが、これは京大に出したので、AACCKに出したのではない。AACCKの山の力に対して出したのではないということに、みな気が付いているだろうか。

高村…京大だから金を出してくれることは、皆気づいている。そのことの座り心地の悪さに気づきながら、続けられてきた。

松原…井上治郎もいっていたが、未踏峰に魅力はない。五―六千米級でも地域のおもしろさと探検の見方があれば、結構おもしろいところがある。帝國的な山登りの魅力は、帝國的義の力がなければ行くことができない地域に行けることで、そういうときには使ったらい

いと思う。ヒマラヤのソロや、カカルボラジをやった尾崎のような人の場合は、AACCKという組織はいらない。

広瀬…処女峰には価値があった。募金を頼むこともできた。メイリは社会的にアツピールしない。別に登らなくてもええ山やないか。

寺本…京大暴力集団の力はまだおちていない。むしろもっと悪質になった。

広瀬…京大の威力はおちてきている。

横山…私はここ二〇年間で一番AACCKを利用したと思う。利用されたこともある。私はAACCKという組織は非常に利用価値があると思った。だから入った。

小さな会ではなく、登る人のほかにサポートする人もいる大きな会であると思った。

ヒマラヤの処女峰の意義を訴えるのが苦しくなってきた。メイリが最後のものと思っていた。山の登り方が変わってきた。エベレストが登られて以後は、高いところというよりも、どういう登り方をするかということに重点がおかれた。純粋なスポーツとちがう点は、たとえば棒高飛びではポールを代えていくだけでも記録に挑む、しかし山登りはたとえ、ポールを使わないというやり方だつてある。自分が楽しむために登る。メイリに行った人たちと登山があまりに違うと感じた。それはシェルパの使い方である。私であれば、何を使ってでも登っただろう。メイリは今までのAACCKの登り方とはちがう。

AACCKの利用価値としては、情報の収集能力、ノウハウの蓄積がある。

森本…私らのときは、AACCKのバイオニアワークに対して、はじめから自分が参加できた。中国の山を対象にするようになってから、隊員として全体がよく見えなくなった。前はど

うして隊を構成し、積み上げて行くかが若い人にもよくわかり、興味があった。チヨゴリザでもその後の山でもそうだったが、ナムナニ以後、お膳立ては一部の人がやり、一番おもしろい部分がなくなった。若い人は登山だけというやりかたに変わったように思う。組立てる部分がなかった。

広瀬…AACCKにはエネルギーを注入するに足る目標がなくなっている。エネルギー不足。

JACCKはどうか。

斎藤…中高年対策が問題だ。誰とどのようにして登れば良いのかとまどう新入会員がふえている。しかし、やる人はいる。学生部というのがあり、各大学の若い人を集めると、結構やれる。たとえばK2隊。少しずつ山岳部出身者がふえているのではないか。

平井…K2の場合、何も新しいものはないのに、何が魅力の点になつていなのか。

斎藤…新しいルートから登るとか。底辺を広げようという努力はやってい

松井…今西先生が創ったAACCKは、ヒマラヤの初登頂をしようと努力をしてきた。いい花を咲かせようと肥しをやったりして、いい花が咲いた。花が咲いてしまったらあとどうしたらいいか。花の先にまた花を咲かせるのか。花が咲いたときは同じ考えの人が集まっていた。小さなグループだった。今はちがう。

力が強くなると社会的影響力をもつ。AACCKが登るとなると世間が注目する。ちよつとへまをするとたたかれる。

若い人を入れないといけないが、先鋭化したいきかたでは若い人と合わない。漠然として境界がよくわからないもの、不確定のものに若い人が集まってくる。AACCKも笹ヶ峰会的性格をもたせるべきである。

高村…先鋭的とはいふものの、当時は繊維、食品などの研究で副産物が残せた。今は残せなくなった。当時京大はインターファカルティとして成果をあげた。いまやインターユニヴァーシティである。学術などは一大学でやるよりもインターユニヴァーシティでやらないといけない。現在ターニングポイントに来てい

左右田…活性化のために必要なのは、山岳部、探検部の若い人である。山岳部長を務めていて感じたことは、若い人はヒマラヤとか未踏峰に関心をもっていない。バイオニアシップを強く意識していない。テレビでエベレストの山頂風景を見られる世の中、若い人にバイオニアワークをいうことは無理である。反発させないほど無関心である。今もし、今西さんが生きていたら、AACCKとしてヒマラヤに行くことはナンセンスというだろう。全盛期のときですら、AACCKにOB会として入った人が多いのではないか。AACCKが自分に対して何を与えてくれるのか、与えてくれるものがないからということ若し人は入ってこない。OB会として入った会員を除名も

しくは退会してもらって少数者でやるか、幅広い会にするのか。

AACKは今後、学術と山を結び付けたライトエクスペディションをやる、そして一方ではOB会的な性格をもつ曖昧模糊とした会にするのが本当であろう。

西山：私がうけた印象では、AACKはよそとは一味違って、処女峰、学術であった。しかし現在処女峰のランクはさがった。組織は展開していかないとけないが、たとえばヒマラヤ医学研究会のような展開もある。笹ヶ峰ヒュッテをチベット高原に作るのなら大いに意味がある。お金も見合うだけの成果があれば集めてもいいが、中国の要人を呼ぶだけではだめである。こうした展開が開けてこなければ、休会にしても良いのではないか。

酒井：休会説まで出てきたが。西山：いや、例えばの話で。

高村：今までも、高所医学や農学など断片的には研究・発表しているが、アルペンクンデとして、整理する義務はあるだろう。

広瀬：たとえば高村のアフリカ調査などAACKとは関係がない。山と関係がない。

高村：ネパール、カラコルム、チベット、雲南など、積み重ねはあるが・・・

広瀬：今西さんは『日本山岳研究』など登山と学術の総合を考えていた。

高村：学術ということで継続性があるのか、ないのか。そこらあたりでできませんか。

能田：山登りと学術の関係づけは今と違ってはしんどい。若い人は学術的におもしろいプロジ

エクトでも、のつてこない。私はグリーンランドのおもしろいプロジェクトで京都周辺の若い人たちに声をかけたが、みんな知らん顔だった。パイオニアシップは学術の面でも残っていない。

西山：処女峰がなくなると同様、フィールドワークの面でも処女地がなくなった。

高村：まだまだ探検的な地域はある、登る山はあるという意見がある。

能田：AACKは常に凶々しいものでないといけないというのはかなわん。処女峰登頂主義の看板はおろしてほしい。

酒井：現状の認識という面ではこれまでにほとんどの出席者からご発言がありましたので、一五分休憩をとりましょう。

## 第二部 AACKの将来展望とその方策

酒井：これから、主に将来のあるべき姿とそこに至る方策を語ってください。

松原：今日の会私くらいの世代（四〇歳前後）は伊藤くんくらいしかいない。こういう会を三〇代の人も多く集まれるようなからくりを作ってほしい。

高村：高村さんの話を受けて、西山さんがフィールドワーク自体に魅力がなくなっているという話であるが、なぜか。

高村：前はフィールドワークは処女地に入って調査したが今はちがう。人類学会もいまは生態人類学会と発展した。山にいかなくてもこうした学会に行けば研究ができる。

松原：細分化がすすんでいる。しかし一方、総合化もすすんでいる。医学、農学、民族学、などもつとやる人がいるのではないか。

高村：エクスペディション風にやっていたことが、学問という形でエスタブリッシュされた。専門化が進んだ。

西山：フィールドワークの性格が変わってきた。単に空白地域に入っただけではだめ。

広瀬：伊谷さんが猿をおいかけていた時代はAACKも共鳴した。しかし今はいかに科学研究費をとるかということなどで、性格が変わった。

能田：昔はワーと行ったらなにかは得られた。今はそうはいかない。

広瀬：エスタブリッシュされていない分野はないのか。

中島：生活がよくなりすぎた。フィールドワークでめしをくつていける時代になって、大学の先生が増えすぎた。

AACKは趣味の集まりである。しかも多くの大学教授がいる。AACKの特徴は学術でないしそれに共鳴する者の会だから、山に登ることがアクティビティと限定しないほうがいい。いろいろな人がいろいろなことをしていて。そういう人から話をきくだけでも自分の知識の中に取り入れられる。そんな組織でもないのではないか。

笹ヶ峰会は過渡的なもので、AACKは専門家集団であるべきだという考えはかなわないからOB会的なものとしてきたのである。専門家集団的なものもあり、OB会的な

ものもある、融通のきく組織であればよいと、私は考える。

松本…忘れてはならないのは、AACKは社団法人であるということだ。法人を組織した以上社会的責任はある。何をしているかと問われたとき、していることを社会にアピールしないといけない。若い人が入ってくるこないの問題の前に、現在いる会員の意識をはっきりさせることが活性化の原動力と思う。

中島さんの言われるように、文化サロンのなものでもいいが、その面はその面で求心力は出てくると思う。

メイリは三回失敗した。企業なら倒産である。しかしこういうこともやっているということ発信していかないといけない。会員ひとりひとりの意識を考慮することが大切である。

高村…首都圏の方は、最近沖津さんが山行企画係として活動をはじめた。こちらからも装備・基礎資材や資金援助をする必要がある。

平井…AACKは山岳会である以上、登山活動をするべきである。山に登る者は社会人山岳会に入って活動している。JACの山行き例会のようなものを作らどうか。神戸大学山岳会でもはじめている。山行き例会を計画することが呼び水となって若い人もひっぱり込めるし、会員の親睦にもなる。

新井…会長、理事の若返りをはかってほしい。いつまでも昔を引きずってゆくのでなく、若い人が幹部になれば、平井さんのいうことも可能になるのでないか。

登山の流れの衰退はいつまでも続くかどうかかわからない。次の世代に入ると、新しい思想が出てくるのではないか。休眠的な動きを加味しながら、われわれ化石人種は退いて若い人にバトンタッチしていかないとけない。

松井…反対の意見をいうようだけど、会長は会の顔であり、あまり若い人ではどうか。ただいっしょに仕事をする理事には若い人を入れた方が活性化すると思う。

新井…若い人を入れるといっても、もちろん段階的にしなければならぬことはよくわかつている。

高村…AACKで企画委員を作ってアクティブテイの具体的な立案もお願いして、小集会という形で山行きの報告や企業の人の話などを聞く会などを作らどうか。

能田…AACKで山行きの例会をしてもだめだと思ふ。チンボランのときにかき集めなければならなかった。だれも参加を申しこまなかった。

平井…チンボランは海外の山で、時間も費用もかかるので簡単には行けない。

寺本…誰かに云ったのだが、チンボランは梅里雪山より三〇メートル低いだけなんや。しかし未踏峰ではないので、AACKでは魅力がないのちがうか。

平井がいうような山行計画をたてても、いっしょに行こうという者はあまりないので

酒井…昔はOKKでスキー山行を計画した。比良

へ行こうという話もあった。近年は絶えて久しくない。

左右田…今まで受け入れられる土壌がなかったので山行き例会も盛んにならない。企画委員会を作ることに賛成する。AACKとしてパイオニアシップを実行するグループと、笹ヶ峰会的グループのどちらかにするのではなく、曖昧模倣とした形で、いろいろな活動ができるようにしておいたほうがいい。ライトエクスペディションのグループ、日本の山登りのグループ、いろいろなグループがあってもいい。社会的背景が変わっていることを意識してAACKの行きかたを考えなければならぬ。

齋藤…ニューズレターでAACKに入らなかつた人が先鋭的な山登りをするべきだと書いていたが、そういう人がそれを実行しているとは思えない。

高村…チヨゴリザ登頂四〇周年記念事業を来年度の事業計画に入れ、講演会、展示会、ツアーなどを行うことになるが、これを契機にいろいろと考えたい。新井さんの玉山などいろいろな位相のものがあってもいい。年に何回かは呼びかけをしたい。仙台でコーポルトヒュッテ（山形高校）を再建したら部員がふえたという例もある。

新井…来年には長野から高速道路が開通し妙高インターチェンジが完成する。それだと東京から三時間で笹ヶ峰ヒュッテに来れる。そういう流れのなかでヒュッテを再建して、利用しやすくすれば、首都圏の会員を中心として

利用形態が変わってくる。平井さんの山行き例会もそのなかに組み入れることができる。

左右田…笹ヶ峰ヒュッテの改築計画に対して責任を感じている。大学側の了解を得て具体化しようとしたとき、私はメイリ計画に深く入って、一時凍結したのが今まであとを引いている。地元の杉野沢村では五八木あたりまでは開発をするが、ヒュッテの周辺は聖地として保存するといっている。

広瀬…今西個人商店をどうするかであるが、クラブライフがあればいいと思う。山登りの団体であるから、平井のいうそういうことができれば存続できる。ただメンバーの中で、世話役がいるかどうか、エネルギーがあるかどうか。なければつぶれてもやむを得ない。

寺本…こんな世話役は自発的に出てくるのが普通なのに、むりやり作らないといけないのが悲しい。

広瀬…年に何回かクラブライフをエンジョイできるならいいが、できなかつたらこんな会はずぶせ。

高村…クラブライフを楽しむためにはオフィスが必要である。現在使っている場所も将来は問題になる。年間五〇〇〇円の会費で何をしているか、会員にはわからない。

中島…クラブルームにいれば誰かいるというような雰囲気してほしい。

齋藤…ボランティアで一生懸命やる人が必要だ。

横山…平井さんのいうようなことをするために、時間の出費を覚悟しなければならぬ。かなりの人数が必要だが、会員の中で、しょ

っちゅう話をする機会を作らないといけない。会員が会う機会、情報交換をする必要がある。そのひとつが山登り、講演会は外部に発信する機会でもあり、会員の集まる機会にもなる。

その意味でニューズレターは大いに役にたっている。

酒井…外向けの講演会は大事な仕事だ。さいわいタレントもいるのではないか。

能田…山岳部員の途中退部者が多いことはなぜか、考えないといけない。ある山岳部OBは山岳部の四年間ほど不愉快な思いをしたことではないと言った。水曜会というくだらん議論で時間をとった。水曜会で検討することがいじめの会となつている。水曜会のほか、リィ夕会、学年会と会合が多すぎる。いまだき地下足袋をはいて岩登りをしている。形骸だけが残っている。

横山…まじめな人が多すぎた。ごろごろしている人が少なくなつた。遭難の結果、検討も大事だが、悪いところだけが残つた。楽しむために山に登るといふことを忘れていた。

松本…外部に向けての取り組みだが、PTAなどで講演をしてほしいというときに、依頼の窓口をAACKとして、レシピを作つてPRするというのはどうか。そうすれば山登りにも若い人が興味をもつてくる。AACKにはそれだけのスタッフがいるので、できると思う。今西商店の伝統だけでは食つて行けない。

横山…私は南極の話を一〇回くらいしたが、南極

観測も後継者不足はわれわれといっしょだ。今、二五〇〇メートルまで大陸氷床をボーリングしているが、あのプロジェクトに直接関係したものは山登りをしてきた人たちだ。講演を頼まれたときなるべく引き受けているのは、山登りのおもしろさ、フィールドワークのおもしろさをPRするいい機会だと思つてらだ。

高村…新聞にもPRして、AACK主催で講演会をしたらいい。高所医学とかフィールドサイエンスとか。

酒井…AACKのPRと社会的還元のために有効な方法だ。

森本…私はいま公益法人に勤めているが、公益ということとは全ての人にとって公益と思われないうことではない。社団法人なら世の中の人がなるほどと思うようなことをしないとけない。外部に対する働きかけはぜひやってほしい。

齋藤…AACKの活動には事務の人が必要だ。金をだしてでも常駐の人がほしい。

寺本…先ほど理事が在外研究で一年間留守になる話があつたが、後任はすぐに作らないといけない。

伊藤…AACKの会費と雪山讃歌の著作権で合わせて二三〇万円くらい年間に入るが、文献センターの借室料として七〇〜八〇万円いる。これも年々あがる。文献センターの活用も考えないといけないが、仕事をする人がいない。大学院生でAACK会員がいない。京都に

院に残らず就職し、東京に行ってしまう。

能田・外部発信、山行例会などまじめな話してあるが、中高年、若い人をアルコールでつるといふのはどうか。曜日をきめてどこかで飲んでいふということにして、若い人はただにする。

潮崎・学会では採算ポイントは会員一〇〇人である。六〇人では赤字である。AACKは収入の面から五〇〇人の会員があると考えると、会費を値上げするか、現状のままだとやれることは何かを考えないといけない。

大衆路線化は六〇歳をすぎると、やることはだいたい山登りである。この流れでJACはふえていく。AACKは仲間としての大衆化である。皆を集めて山行き例会をやらせないといけない。チャンボランよりも、もう少しレベルを上げた計画をして、国内山行でもよいし、会員にサービスすることである。

清水・AACKは非日常的な会で、一年に一回の総会だけで、遠征があっても会員の大多数は第三者的対応である。これをもっと日常的な会にするべきである。集まれる場所があつて、山行に限らず会う機会をふやすことが必要である。理事に企画担当、会計担当等役目を負わすべきである。

中島・理事はアクティヴメンバーである。遊びのりでおもしろがつてやってくれる人のグループでなければならぬ。

高村・年齢にこだわらずに、アクティヴにやってくれる人を理事にしたい。AACKは旧制高校の寮歌祭に似た運命にあり、いずれはなく

なるものかも知れない。しかしできるだけ地平線は遠いところにあると考える。

酒井・現状認識と将来の展望についてたくさんの意見を聞かせていただいた。この準公式の話し合う会の記録は、なんらかの形でニューズレターに収載し、AACKの活性化に役立たせたいと思う。長時間にわたり忌憚なきご意見を頂戴し、ありがとうございました。

「話し合う会」を終えて この会合は伊藤

宏範、清水浩の両氏と私の三人が呼びかけ人となって開かれた。近畿各府県と岐阜、愛知、新潟各県に住む会員のうち七〇歳以下の人はほぼ全員約八〇人に案内状を送り、首都圏からも誰か一人は出席してほしいとお願いした結果、前記二〇人の参加をみた。ほとんどが五〇歳を越えていて、半数近くは六〇歳以上である。もっと若い会員の発言を聞きかかったし、呼びかけ人に若い人が名前をつらねた意味はそこにあつたのだが、全体として高年齢者が多い会になってしまった。

多様な意見の表明を求めのが一番の趣旨だったので、結論を出そうという意向はもともとなかったが、今後のAACKを考える際に何ほどの参考になるのではないか。次には首都圏在住の会員諸氏が話し合う会があつてもよし、年齢の上限を定めて集まって話し合うのもよし、もちろん、会員が自由な立場で本誌上で主張や見解を示されることになれば、この会は一定の意味をもつたことになる。

(酒井敏明)

## 中国・太原 での二年間

本仁久一郎

一九九四年八月末から九六年七月初めまでの二年間、私は中国山西省太原工業大学で、日本語教師としての日々を送ってきた。

九〇年十一月、定年退職により会社員生活に別れを告げた後、経済活動を離れ、かねて念願であつた国際文化交流に従事すべく、外国人に対する日本語教育の道を選び、九一年から大阪市内の日本語学校に勤務していたが、九四年春、中国国家外人専家局の招聘を受けて、中国へ赴任することになった。

九四年五月のAACK総会の時、Yさんにそのことを話したら、彼から「何とかして昆明大学に行ってくれよ」と要望があり、早速日本側の派遣窓口に希望を伝えたが、当の昆明大学からは日本語教師の派遣要請がなく、外専局からは太原工業大学が割り当てられ、「来年は是非実現しよう」とお互いに誓い合つて赴任したのであつた。

昆明大学から外専局に対する、日本語教師派遣

の要請は九五年もなく、一方太原工業大学からは一年延長の要望が出され、外專局の承認も下りたため、九六年七月初めまで太原で過ごすことになった。

太原は山西省の省都であり、石炭と鉄鉱の産地として、これらを使った製鉄その他の産業が、市の経済を支える工業都市である。戦時中は戦略上また資源確保の重要拠点として、数万に上る日本人が、この地に駐屯・居住していた。

しかし太原市が、三千年以上の古い歴史を持つ町であることは、あまり知られていない。この町は、秦の始皇帝が中国を統一する前の春秋戦国時代に、周の晋王がこの地を都として以来、幾多の興亡を重ねながらも、晋州（現在の山西省）の政治・経済・文化の中心地の地位を保ってきた。

市の南方六〇キロの人里離れた山中には、浄土宗の開祖・法然上人が留学修行した玄中寺があり、浄土宗や浄土真宗の参拝団が、数多く訪れていることも、仏教関係者以外には知られていない。太原へは日本人観光客もほとんど来ず日本の進出企業も数える程しかなく、市内に在住する日本人は、山西大学の留学生二〇人ぐらゐを除けば、片手で数えられる程であった。

私が担当したのは太原工業大学の教職員を対象としたクラスであり、初級と中級の二つ。時間は毎週月～金曜の夜七時から二時間半。文法を中心としながら、限られた時間内に聞く・話す・書く力を如何にして高めるかが課題であり、いろいろと試行錯誤を重ねなければならなかった。

教職員たちが日本語を学ぶ目的は、(1) 日本への留学準備、(2) 日本に留学中の配偶者を追

って家族ビザでの渡日準備、(3) 日系企業への就職、(4) 日本語の学術文献の閲読・翻訳等であるが、やはり最大の目的は「日本へ！」であり、この二年間の教え子の中から、既に十人以上が来日している。

彼等は明白な目的を持っているだけに、学習態度は極めて真摯であり、懸命に授業に食いついてきていた。しかし教室以外で日本語に接する機会のほとんどない彼等は、教科書に出てくる語彙以外はあまり知らない、聴解力が極端に低い、思ったことを口でも字でも的確に表現できない、等の問題を持っており、レベルアップは並大抵のことではなかった。

大学の外事処には、英語を話せる人はいても、日本語を話せる人は一人もおらず、日本語教育の進め方も知らないため、指導計画は私に一任されており、やり易さとやり難さが共存していた。

教室でたどたどしい日本語の相手をする以外には、仕事の連絡や生活上の会話はすべて中国語であり、日常生活には不自由を感じることもなく過ごせるようになった。(中国登山協会幹部との懇親会の席上で、日本語の挨拶を通訳させられて、大恥をかいてしまったが)

大学からは、居間と書斎と寝室の三間に、バストイレとキッチンの付いた宿舍を提供され、月給一二〇〇元。朝と昼は近くの自由市場で仕入れた食料を、温めたりちよっと加工したりして食べ、夕食は外人教師食堂で摂って、比較的ゆとりのある生活であった。他の大学に赴任した日本語教師の中には、食事や環境のことで不満を言ったり、悲鳴を上げる人もいたが、敗戦直後の下宿生活や

合宿での雑食を経験した身には、住めば都の境地で十分に順応する事ができた。

中国人の給与は、改革開放の進展と共に上昇したが、大学の教職員は四〇〇〇六〇〇元（現在のレート一元十五円で六〇九千円）なので、外国人教師の給与は彼等に比し、破格の額であった。とは言っても、日本円で一万八千円に過ぎない。

私は一九五三年初めて就職した時代のことを思い出した。当時の初任給は一万一千円で、一ドル三六〇円のレートでは一か月三〇ドル。アメリカの一般ワーカールの週給が二〇〇ドルだったとか。当時のアメリカ人の生活は、日本人にとって夢のまた夢であったものだ。現在、中国からの密航者が跡を絶たないのも、為替レートのなせるわざと言えようか。

中国人の生活レベルは、八七年に初めて深圳・上海に出張した頃に比べて、遙かに上昇している。しかし物価も上昇が続いている。市場経済の発展と共に、貧富の差が拡大し乞食が増えたことも事実である。多くの矛盾を孕みながらも、十二億の人口を抱える大中国が、二十一世紀に向けて経済建設の道を進んでいることを、体験した二年であった。



# AACK人物抄

## 高橋健治さん

—その4—

斎藤清明

前回に続いて、高橋さんが執筆した登山関係の文章をひろっていく。

『三高山岳部報告』第7号第5冊（卒業生送別・冬山回顧号）Ⅱ一九三〇（昭和五）年二月Ⅱに、「大学に彼等を迎ふるに際して」を、またその末尾の横組み別冊に講話「冬山エキップメント補遺」を書いている。ちょうど、関西学生山岳連盟が高橋さんなどが中心になって発足したばかりで、主要な登山記録は連盟の報告書に掲載されるということもあって、『三高山岳部報告』は第6号（一九二九年一月一日発行）のあとしばらく部内雑誌的になっていた。「カットステップ」と名付けられ、「青雑誌」とか「青本」とも呼ばれ、それまでの『三高山岳部報告』が活版で対外的な役割を担っていたのに対して、こちらはガリ版刷りで同人誌のような体裁である。後にこの年（一九二九年五月から三〇年二月まで）に出た5冊を合わせて『三高山岳部報告』第7号とされる。

この号の別冊には今西錦司さん（当時、京大理学部大学院生）の講話「一九三〇スキーシステム」と高橋さんの「冬山エキップメント補遺」が載っ

ている。二人は三高山岳部の後輩たちの冬季合宿などに指導者としてたびたび参加しており、その体験をまじえ、システムとしてまとめたものである。

「大学に彼等を迎ふるに際して」は、三高山岳部の後輩を京都帝国大学旅行部に歓迎する辞であるが、高橋さん自身も京大を卒業することになっており、三高（三年間）と京大（五年間）の学生生活を終えるに当たっての感慨を述べている。「都会人からは『とり残されたる彼』として銘を打たれた山生活に八年の修練をしたことを思い返す」と。そして、後輩たちに、「沈黙と実行の徒よ。暫くは、アカデミケルとして、元気で、新しき登山の創造に努力せられよ。模倣登山者を相手にせず、常にパイオニアの精神を以て行きた」と呼びかける。「『とり残されたる彼等』として、彼等は大学生活の終りには真のマンテナーにまで磨き上げられなければ、三年の生活を、四年に延ばすとも惜しくはない」。末尾にG・W・ヤングの詩「自由」を綴り、鼓舞している。

高橋さんは山に打ち込んだほか、一時、病氣療養したため、大学を二年余計にかけて卒業する。と同時に、この文章の出たころには、植物学研究のために渡欧していた。約二年間、ミュンヘンに拠点に、登山とスキーにも打ち込んだことは既に触れている。第8号第3冊Ⅱ一九三〇年一〇月Ⅱに、「高橋健治氏消息」として、シベリア鉄道の旅からベルリンを経てミュンヘン到着が、高橋さんからルームへの手紙の抜粋として紹介されている。その中には「三高の事故は欧州のこなたまで

響き渡っている。しつかり頼む」もある。そして、「いよいよ秋が来たので氷河を踏みに出て来た」とアルプスでの行動開始を告げている。

次の第8号第4冊Ⅱ同年一二月Ⅱには、『三高山岳部報告』第8号第3冊を読んで」を寄せている。ミュンヘン発一〇月二九日の来信。異邦で部報を受け取った喜びを記し、「故国よりのいずれの手紙の返事よりも先に諸君の報告を読んだ後の私の感想を書きたい」と、部員の一人ひとりの名前を挙げて率直に意見を述べている。例えば、「君はいい要領と正直を持っている。山男にはこれが大切だ。冬のこと少し勉強しては如何。君のカルチャーにいい本を見つけて私は返事をしてあげる」などと、じつに懇切である。

第8号第5冊Ⅱ一九三一年二月Ⅱに、いよいよアルプスでの登山行が載る。「ブレイグラウンドをめぐる」と題する長文（二四頁）の寄稿である。まるで、日本山岳会創立の機運を作り、日本の山岳を世界に紹介した英国人宣教師ウエストンの「極東のブレイグラウンド」（一九一八年発行）を意識したかのようなタイトルだ。

この文章は、高橋さんのアルプスでの最初のシーズンに、三高山岳部の先輩の山内彦氏（京大理学部動物学教室講師）と、三高・京大での仲間の奥貞雄氏の三人でユングフラウ、ブライトホルンなどを登った記録のほか、一人でツェルマットに滞在して氷河を探索したのを日記風に綴ったものである。

これら、本場のアルプスから直接に京都の後輩たちへの便りが、AACK創立への機運につながったにちがいない。（続く）

# 「京都大学学士山岳会」

## という名称について

平井一正

よく知られているように、AACCKは今西錦司、桑原武夫、西堀栄三郎などが中心になって、一九三一年に結成された。しかし当時はAACCK (ACADEMISCHER ALPENCLUB KIOTO) と称し、京都大学学士山岳会という名称はなかった。現に昭和十二年の会則にも、「本倶楽部はアカデミッシュアルペンクラブキョウト (A.A.C.Kyoto) と称す」とある(注1)。AACCKは昔から、英語風にエーエーシーケーと呼ばれているが、本来はドイツ語風にアーアーチエーカーと呼ぶべきであろう。AACCK創設三〇周年記念式典のときに、来賓としてこられた高木正孝氏(東大OB)は、挨拶の中で、はっきり「アーアーチエーカー」と言われたことを記憶している人も多い。(梅棹、高村)。

類似の名前があり、当時ヨーロッパに留学していた高橋健治(一九三二年帰国)が伝えたことは想像に難くない。また今西らはこれら山岳団体の名前を、アルパインジャーナルなどで知っていたので、そのまま、その名前を使ったのであろう。しかし、一体、いつ、だが、AACCKの日本語名として、「京都大学学士山岳会」という、やや時代が違った名前をつけたのか、これについて調べた結果を書いてみよう。

梅棹忠夫によると、戦後、AACCKが社団法人として登録するのに日本名が無いと困るのでつけたのではないかということだが、実は社団法人になったのは一九五九年の末で、一方、一九五三年のアンナプルナ遠征報告書では、編者が京都大学学士山岳会となっており(注2)、このときにはすでにこの名前は定着していたようである。そこで社団法人の登録のためではなく、きつとアンナプルナ遠征のための募金や外貨申請など、対外的な折衝が必要になってつけられたのではないかと考えられる。また戦後長らく開店休業であったAACCKが、桑原武夫を委員長として再建されたのが一九五二年春のことであり、このときに議論されたのかもしれない。当時ヒマラヤへの胎動の時期でもあり、日本名が必要になったのかもしれない。

誰がそのときの命名に関係したかはわからないが、梅棹忠夫が関係していたことは、彼の著作によっても明らかである(注3)。それによると、「アカデミッシュ」を日本語でどうかくべきかが議論され、「翰林院山岳会」という案もでたそう。結局、学者の団体として学士院があり、帝

国大学の卒業生の組織として学士会があるので、それでその名をかりて学士山岳会としたとある。

また「京都学士山岳会」か「京都大学学士山岳会」のどちらにするかも議論があった。会員には京都大学出身者だけでなく、京都府立医科大学の谷博のように、京都大学以外の人も入っていたので、「京都大学」でなく「京都」だけの方がよいのではないかという意見もあった。しかし結局は「京都大学」におちついた。ちなみに今西寿雄は、今西錦司の追悼の辞のとき、わざわざ「学士」を消して京都学士山岳会という名称を使った。

以上をまとめると、AACCKという名称はすでに六十六年も前につけられたが、京都大学学士山岳会という日本名は、戦後まもなく、AACCKが再建された一九五二年春か、またはその直後につけられたと考えるのが妥当であろう。

なお梅棹の記憶によると、AACCKのドイツ語名の中で、zu Kiotoとzuが入っていたように思うとあるが、原文には無い。またチューリヒにあるAACCKにもzuは入っていない。ただ京都大学のドイツ語訳はdie Universität zu Kyotoなので、このあたりで混乱を招いているように思う(笹ヶ峰ヒュッテの入口の表札に、このドイツ語が書いてあったのを記憶されている会員も多いと思う)。

なおこの文をまとめるに当り、梅棹忠夫先生にはいろいろとご教示をいただいた。記して深く感謝する。

(注1) 今西錦司編：『ヒマラヤへの道』中央公論社、昭和六十三年、p.95

(注2) 京都大学学士山岳会：『アンナプルナ日

AACCKという名称は、たとえAKADEMISCHER ALPENCLUB, ZUERICH (AACZ) や、その他Bern, Muenchenなどヨーロッパの山岳団体に

記」茗溪堂、昭和三十一年

(注3) 梅棹忠夫…『梅棹忠夫全集第十六卷

山と旅』中央公論社、一九九二年、p.

307-309

(もし会員の中で、さらによくわしい情報をご存  
じの方がおられましたら、ご教示いただけま  
したら幸いです。文中敬称略)

## 書評

中村 進著

### 『未知への旅 —南極点スキーマラソン—』

酒井敏明

著者はテレビ会社に勤めてテレビドキュメンタ  
リー番組の制作に携わるカメラマンで、登山家と  
しても著名である。日本大学山岳部時代の一九六  
八年、グリーンランド横断計画に参加、早くから  
極地への熱い情熱を抱いていた。その後一九七八  
年に犬糧による北極点到達に成功、一九八八年の  
チョモランマ三國友好登山隊に参加して、頂上か  
らのテレビ生中継では現場で活躍した。

一九九四年十一月から十二月にかけて、ウエツ  
デル海の奥、ロンネ棚氷の海岸ハークュリーイン  
レットから南極点までの氷床一二〇〇キロをスキ  
ーで踏破する冒険に挑み、支援隊の友人四人にと  
もに見事成功した。副題が示すとおり、その記録  
が本書である。

若いころから南極点に立ちたいと思っていた著

者は「ぼくのような未熟者が少しでも自分を高め、  
南極の自然をよく知るためには、「原因と過程」  
を、体験を通して見なくてはならない。」と思う。

「他人の真似をするより自分なりの創造力を発揮  
して行つた方が絶対に楽しいし、喜びも大きいか  
らだ。さらにもうひとつ、極力道具に頼らず、手  
足の筋力だけで行いたいと思つた。」そこで、  
「四人の仲間の協力を得て、食料、装備、燃料な  
どの運搬は二台のスノーモビルで行い、南極点ま  
ではクロスカントリースキーを使って独りで走  
る、スキーマラソンという方法を選んだ。」

テント、食料、撮影機材、燃料など、出発時の  
総重量二・四トンの荷物を二台の大型橇に積み、  
二台のスノーモビルで牽引する。支援隊はスノー  
モビルに分乗してマラソンスキーヤーに先行、五  
キロごとにスキーヤーが橇隊に追いついては再び  
橇隊が先行する方式で、一日三〇〜四〇キロ進む  
というのが、中村氏が採用した戦術である。

橇はイヌイットが使用しているのをモデルにし  
た手作りの木製である。スキーは長さ二メートル、  
幅四五ミリ、靴も防寒着も素材の良い、信用でき  
るものを選んで準備した。輸送能力に限りがある  
ので、食料も燃料も最小限におさえた。

二四時間太陽が没することがない夏の南極大陸  
であるが、低温、強風、ホワイトアウト、ヒドン  
クレバスなど、過酷で危険な環境であることは、  
チリのプンタアレナスから大型四発機が六時間で  
人間と荷物を運んでくれ、極点に巨大なドーム基  
地が建設されている現在も、変わらない。

十一月十三日海拔二〇〇メートルの出発点をあ  
とにし、十二月二十九日南極点に到達するまで三

## 会務報告

定例理事会(一九九七年三月二〇日(木))

一三時〜一六時、京大会館)

出席…高村会長、酒井副会長、伊藤、岩坪、

上尾、斎藤、吹田、左右田、竹田、

西山、松林各理事、藤田、山口各理事

足立、新井、清水、睦好

委任…岩瀬、田中、能田、横山、森本

議事…一、平成九年度事業計画について

二、平成九年度収支予算について

三、その他

事務局担当者吹田、竹田両理事が  
研修のため近く海外在住になるの  
で、伊藤理事と清水浩、足立みな  
みの各氏が代行する。

平成九年度総会を五月一八日(日)  
におこなう。

(酒井敏明)

## 図書受贈の報告

この三月左記会員から蔵書の寄贈を受けま  
した。ありがとうございます。

岩坪五郎氏 一〇六冊

林一彦氏 四三冊

九日間、晴れの日も曇りの日もスキーを交互に前へ滑らせる。休養は三日だけ、大陸氷床中央部から海岸地方にむかって吹き下ろすカタバ風にさらされて、アイスフォールを登り、鋭いサスツルギに足元をとられないように気を配る。気温は始めのうちはマイナス一五〜二〇度、高度を上げるにつれて低下、海拔二五〇〇メートルを超えるとマイナス二五〜三五度までさがり、体感温度はこれより数度低い。

連日四〇キロほど前進、一二一六キロをスキーで走破して、三九日目に南極点を踏んだ。スノーモビルによる重い櫓の牽引、燃料など消費資材の点検と車両・櫓の保守など、支援隊員のアルバイトも並大抵のものではないが、首尾良く五人そろってゴールに着くことができたのは、見事な業績である。

この時著者は四八歳、南北両極点とチョモランマ頂上に立ったのは世界で二人目である。

梅里雪山学術登山隊に対する  
会員および関係者個人募金  
(1997年2月28日以後)

牛田一成	松井宣也
累計	会員115名 一般19名 計134名
会員	5,785,000円
一般	4,035,550円
合計	9,820,550円

この冒険を成功に導いたものは、周到な準備、豊富な極地と登山の経験に鍛えられた頑健な身体、強い精神力など、幾つか挙げることができる。とりわけ、隊長中村氏の優れたリーダーシップと、運転、観測、撮影、設営などその時々の仕事に余裕をもってこなす四人の友人たちとのチームワークの良さを強く感じた。

危険なヒドンクレバス地帯で肝を冷やすような危険な瞬間があったが、その幸運を感謝する氏は、一九七九年のJACチョモランマ隊でのエピソードを紹介する。登頂に失敗、ピバークの後下山を急ぐ氏を、その時第四キャンプに詰めていて診察にあたった斎藤惇生さんが引き止めてくれた。翌日第三キャンプにおいてみると、前夜に発生した落石のため氏のテントは無惨にも引き裂かれていたという。もし下山を続けていたら、と第四に泊まったことの幸運を思うのである。

神秘的な体験を語る「美しき地球との出会い」の章は印象に残る。実はJAC京都支部定例総会の日(四月十六日)、中村さんの講演を聴く機会があった。大変な内容をもつ冒険行を淡々と語る彼の控えめな話しぶりに或るすがすがしさを覚えていたこともあり、この本は一気に読ませてもらった。誤植が二、三方所ないではないが、行動の詳細なデータは表で示されているし、略地図や写真も載せてあって、親切なつくりの本と評価できる。

編集後記

平井一正委員のあとを受けて私が編集を担当することになった。

AACKはご承知のとおり八年前の一九八八年に梅里雪山の日中合同学術登山計画を始め、昨年の第三次遠征隊は無念にも登頂に失敗した。今後メイリをどうするのか、重い宿題が残されたことになる。

宿題を解くためには、各面各層の努力が必要であるが、このニューズレターもある有用性をもたねばならないであろう。その方向への試みの一つが「AACKの今後を話し合う会」であり、その記録をここに収録したのである。

前任者は本誌編集の滑り出しが好調だったことに気を良くし、年間4号発行という高いハードルを設けてしまった。なるだけその志を継いで行くべく努めたいので、会員各位のご支援、ご協力をお願いします。

なお、AACKのアドレスは暫定的に従来のとおりであるが、今後変更される可能性があるがあるので、注意されたい。  
次号の原稿締切は七月二十日、発行は八月下旬の予定。  
(酒井記)

読売新聞社

一九九六年十二月刊

一五〇〇円

編集委員 平井一正、酒井敏明、薬師義美

発行日 一九九七年五月二十六日

発行所 京都大学学芸部 山岳会

京都大学左京区北白川追分町

京都大学農学部岩坪五郎気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株) 土倉事務所